

東アジア古代服飾の図像学と考古学

—高句麗・渤海・新羅・日本の服飾—

東潮

①高句麗・新羅・渤海壁画の人物像

②高句麗・渤海の服飾

③高松塚古墳壁画の服飾

④キトラ古墳の獣首人身十二支像の服飾

⑤新羅の獣首人身十二支像

⑥唐皇帝の喪葬と壁画

⑦飛鳥時代服飾の系統

4世紀末から5世紀代、広開土王・長寿王代に高句麗領域は遼東地域におよび、その版図内に高爾山城など高句麗山城が分布する。その時代の墓葬は遼寧省本溪や撫順市前屯・窪渾木墓群でみつかっていた（王増新1964）。2000年10月に遼寧省撫順市順城区で高句麗から渤海時代の墓群が発掘された。1号墓は壁画墓であった。さらに石台子山城周辺で高句麗晩期から渤海時代の墓葬が発掘された（瀋陽文考2006、遼寧文考2008）。

施家1号墓壁画の人物図像を分析し、高句麗・渤海の服飾、衣服制についてふれる。高句麗の平壤城を中心として五部五方の領域内の、北辺の遼寧省撫順施家壁画墓、そして南辺の小白山脈南麓の於宿知述干墓、さらに渤海の貞孝公主墓と比較する。

① 高句麗・新羅・渤海壁画の人物像

撫順施家1号墓 遼寧省撫順市街の北、渾河右岸の丘陵上、高句麗高爾山城の東側に位置する。41基の横穴式石室墳が発掘された。1号墓は割石積みの横穴式石室（両袖式）で、壁全面に漆喰が塗られ、北・東西壁に壁画がのこる。床面から90cmの高さで水平に幅4cmの墨帯がえがかれる。東西両壁の中間に垂直方向の墨帯がひかれ、画面が区画される。北壁に墨帯の上方に11人の人物像が並列する。東側の10人は女性で、長裙のもの、短裙のものがある。下部の襠をつける。人物の輪郭、面目、肢体、持物、衣服など墨線勾勒法でえがく。紅・黄・黒色の顔料で彩色される。いずれの人物も一種類の顔料をもちい、紅・黄を交互に表現する。西壁上部北側に蓮花紋がある。西壁下部の北側に3個の馬蹄があるという。東部上部北側に二人の人物、その1人は舞刀する。人

物の南に山峰が遺存するという。1号墓から金耳環、蓮弁紋軒丸瓦、赤色軒平瓦、鉄鏃が出土し、高句麗時代晩期に位置づけられている。5・33号墓の太環式耳飾、23号墓の心葉形垂飾、18・29号墓の鈎帯は高句麗時代晩期から渤海時代のものである。

墓群の年代は1号墓の蓮雷紋軒丸瓦、34号墓の土器、5・30号墓の鉄鏃、5・39号墓の耳飾、18号墓の開元通宝などから高句麗晩期、唐初と位置づけられている。近在する高爾山城の出土遺物と類似する。

1号壁画墓の構造は割石積み、穹窿状天井である。羨道両壁は横積みされる。袖石は大形化している。後室は方形である。鴨緑江流域に分布する石室墳に類する。平壤城を中心として王畿内では三角平行持送り式天井式が発達する。石室内から軒丸瓦・軒平瓦が出土しているが、平瓦は棺床にもちいる。軒丸瓦（1点）の用途は不明。

壁画の題材は墓主葬列（行列）図である。3人目ないし4人目の人物がもつものは天蓋のようである。その前方向の人物は墓主であろうか。高句麗壁画墳で人物像は双楹塚など6世紀初ごろから表現されなくなり、四神図像が主体となる。高句麗の図像の変遷からみると、1号壁画墓は6世紀末葉から7世紀初葉の時期にあたる。ただ墓主図像から四神図像への変化は王畿を中心として、周辺地域では様相がことなる可能性がある。それは慶尚北道栄州順興壁画墳（579）や於宿知述干墓（595年）は高句麗系統の壁画墳である。新羅の丹陽赤城碑（540年）以前に高句麗の移民がのこしたものだ。王畿外の壁画墓には古い要素をのこす。施家1号墓は高爾山城を中核とした「大城」の集団が築いたものである。また石台子山城の近辺で、石室墓が分布する（遼寧省文考2008）

渤海・貞孝公主墓 吉林省和龍県龍頭山墓群に位置する。貞孝公主墓（N42° 40′ 54″ 76、E129° 12′ 31″ 47）（google）は西古城（N42° 42′ 38″ 29、E129° 05′ 55″ 42）の東南（E20° S）に位置する。直線で9.5kmの距離に立地する。貞孝公主墓の後山はなだらかな頂部があり、西古城を遠望できる。龍頭山頂か（北緯、東経）ら河岸平野、盆地が一望のもとに見わたせる。

甬壁と墓室の東西北壁道後部の東西両に壁画がえがかれる。並列した12人の人物像がえがかれる。鉄線描法を用い、墨線で輪郭をえがき、朱、紅、赭、緑、黒で彩色される。甬道の西壁の門衛（武士）は粉面で朱唇。戦袍を着て、肩鎧・甲を身にまとう。袖を巻き、白色腕を護る。花紋飾り、紅色纓で飾り、右手に「鉄搥」をにぎり、右肩にかつぐ。左手に長剣を持ち、劍鞘飾りは黒白色で竹節紋をほどこす。東壁の門衛は西壁のものと同様である。戦袍、佩劍は身体のうしろにまわす点がことなる。墓室の東西両壁の4人の人物像の南側の人物は侍衛である。円領緊袖袍を着る。巻袖。腰に白色革帯。黄色飾り。袍の前の襟は帯内にいれる。紅色花紋の內衣を着る。左手に鉄搥を持ち、左肩の上にかける。墓室東西壁の南側に侍衛が立つ。人物の高さは117cmと大きく描かれる。西壁の侍衛は円領の袖をしばった袍を着る。袖を巻く。腰に白色の帯をしめる。左手に鉄搥を左肩にかけ、左腰に弓囊を佩する。右手に剣をを持つ。東壁の侍衛は褐色袍、黒色の帯をまく。緑色花紋の內衣を着る。黒靴をはく。右手に鉄搥を握り、右肩にかけ、左手にとり、背中に斜めにかける。西壁の楽技3人は約110cmの像。幘頭で円領の長袖の袍、腰に革帯をしめる。麻の鞋をはく。それぞれ琵琶、箏篋、錦囊を持つ。東壁に3人の内侍。各人は紅色包囊、白色包囊、黒色円状物をもつ。北壁の侍従2人は斜めに向きあう。白色の円領で長袍の武人。1人は弓と箭囊を持ち、両手に紅色の傘状物、華蓋に似たものをもつ。

貞孝公主墓壁画の人物像は門衛（武人）2人、侍衛2人、楽人3人（琵琶、箏篋、拍板）、内侍

3人、侍従（武人）2人の12人で構成される。侍衛は箭囊、弓囊をもつ。その形は懿徳太子墓（706年）のものに類似する（池升元1982?）。このように貞恵公主墓壁画のモチーフは渤海王室の内宮を表現したもので、門衛・宮官（内侍）・楽隊で構成される。

龍海墓区の10号埴室墓で男女の三彩陶俑が出土している。女俑は中分けの髪で、双手拱手胸前像の姿。男装で、円領長衫をまとい、腰に鉈尾のついた帯を下げる。男俑は幘頭も双手拱手胸前像で、鉈尾は左後ろの腰から垂らす。唐代宮廷の侍女と一致する。貞孝公主墓の侍従と同じだ。10号墓は平天井式の墓室（3.4×1.8×2.0m）、斜墓道（4.7×2.4m）で、墓上に埴塔を建てた「塔葬」構造である。

貞孝公主は大欽茂（文王、737～793）の第四女で、大興五十六年（792）夏六月九日に卒し、その年の十一月二十八日に「染谷之西原」に陪葬された。「染谷之西原」の染谷は海蘭江の支流福洞河の谷にあたる。

その貞孝公主墓は和龍龍頭山墓群の1号墓である。近年、12号墓が文王（大欽茂）の孝懿皇后墓、3号墓は第9代簡王大明忠（816・817～）の順穆皇后墓であることがあきらかとなった（吉林文考研2009）。順穆皇后は建興十二年七月十五日、「遷安口陵、礼也」。建興十二年は830年で大仁秀（宣王）の時世で、上京龍泉府から離れた龍頭山陵園に埋葬されている。2号墓は第9代簡王の可能性があるという。

貞孝公主が没した翌年の793年に大欽茂は薨去した。東京龍原府の時期である。大興三十六年（772）に王妃卒という記録がみえる（『渤海国志長編』）

12号墓の孝懿皇后の墓誌について報告されていない。大欽茂の第2女の貞恵公主は宝暦4年（777）に卒し、宝暦7年（780）に「珍陵之西原」に陪葬された。葬地は「旧国」敦化六頂山墓群（陵園）であった。貞孝公主墓は孝懿皇后の西原に陪葬された。中京顕徳府の東南の龍頭山の陵園であった。

大欽茂は742年ごろ中京顕徳府に遷都した。天宝（742～755）末年の755年前後に上京龍泉府に遷都する。「天宝の末、欽茂、上京に徙る。旧国より三百里、忽汗河の東に直る」。「顕州は天宝中に王の都する所なり」であった。

大興四十八年（785）、都を東京龍原府に徙す（『渤海国志長編』卷三）。「貞元の時、東南のかた東京に徙る」（『新唐書』渤海伝）。貞元元年は758年である。大欽茂の卒したあと、794年大華璵が即位し、その年にふたたび上京龍泉府に遷都したが、薨去し成王と諡される。

貞孝公主は東京龍原府に都があった時に卒し、中京顕徳府の南の陵園の王妃墓に陪葬されたのだ。貞恵公主は上京龍泉府の時代に卒し、旧国の六頂山陵園に埋葬された。

② 高句麗・渤海の服飾

高句麗壁画に表現された人物図像は、墓主（夫婦）図像から墓主（夫婦）図像と墓主行列図像の変化する。4世紀中葉の安岳3号墳（冬寿墓）に出現する。5世紀後半の水山里古墳では墓主行列が中心画題で、5世紀末～6世紀初葉の双楹塚の墓主と墓主行列図像をさいごに表現されなくなる。壁画の主題は四神図像にかわる。

高句麗の王畿、五部五方を中心に三角平行持送り式天井構造の平壤型石室が分布する。そのいっ

ぼうそれらの周辺には割石積横穴式石室が分布する。

施家1号墳は割石積み穹窿状天井 羨道側壁平積構造である。高句麗領域内の五部五方の中心地域では切石積み三角平行持送り式天井の平壤型石室が存在するが、割石積石室は広範に分布する。地域間において分布上の差違があり、同一地域において階層的な差違がある。

渤海の官位はつぎのように定められている。

官位の秩では、三秩以上の服飾は紫色で、牙笏と金魚をもつ。五秩以上の場合には緋色で、牙笏と銀魚をもつ。六秩・七秩は浅緋色で、八秩は緑衣で木笏である（『新唐書』渤海伝、『東アジア民族志』2）。

官位は服飾の色、紫・緋・浅緋・緑色によって定められている。渤海の風俗じたいは高句麗や契丹とほぼ同じという（『新唐書』渤海伝、『東アジア民族志』2）。

高句麗の服飾は男子が大袖衫と袴、女子が裳（裙）襦であった。6世紀代の施家1号墓の人物像墓の壁画からみて、高句麗滅亡まで同じ服飾であった。

丈夫は袖のある上着、大口の袴、白い皮の帯、黄色い革の履をつけている。冠は骨蘇とって、たいていは紫色の羅で作し、金・銀をまぜて装飾を施した。また官品をもつ者は、さらに二本の鳥の羽をその上に挿んで、顕わし示す。婦人は裙襦を着、裾や袖にはすべて縁どりをしてい（『周書』高句麗伝、『東アジア民族志』1）。

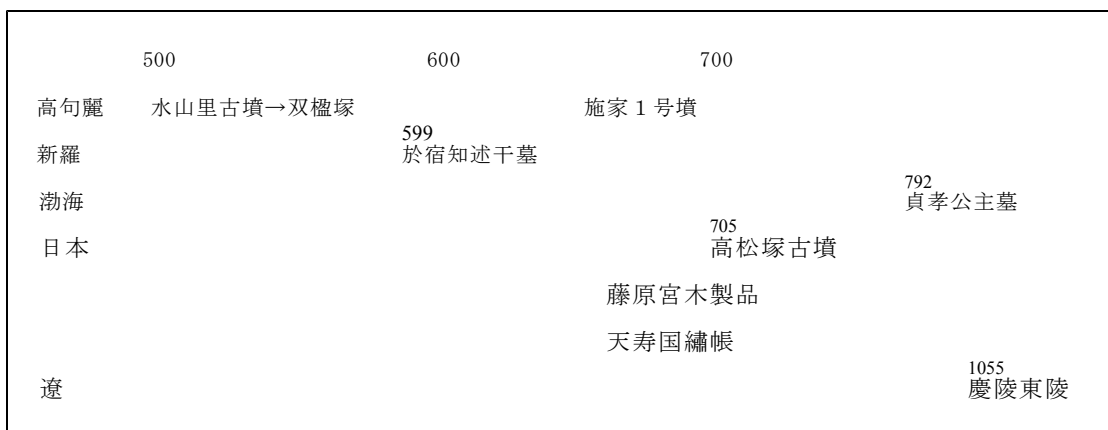
渤海の衣服制は713年、渤海国の成立、唐の冊封体制以降に、鈿帯服飾もふくめ、唐の服飾の影響をうけた。780年の貞孝公主墓の服飾は唐様式である。龍海墓群の10号墓の陶俑の製作地が問題になるが、唐様式である。唐の衣服制の影響はあるが、渤海の制であった。

宝応元（762）年、大欽茂は渤海郡王から渤海国王に進封され、金吾衛大將軍（正三品）から檢校太尉（正二品）へ冊された。武官から文官への変化は渤海の内政と外交、文化に反映する（濱田耕策2000）。冊封体制と衣服制は関係するが、政治的関係のことごとくを律すことはできない。

8～9世紀、唐・渤海・新羅・日本（奈良・平安時代）に鈿帯が発達する。新羅も7世紀末葉に唐の衣服制を採用した（東2000）。

施家1号墓と於宿知述干墓の人物図像 於宿知述干墓は新羅真平王十七年の乙卯（595）年に築造されたものであるが、この順興の地は「本高句麗」であった。6世紀中葉の丹陽赤城碑（545年

表 人物群像・服飾の系譜関係



ごろ) 以前に高句麗の移民が居住していた。その様式の壁画が於宿知述干墓の扉の内面に線刻された人物像である。

アフラシャブ宮殿跡壁画 サマルカンドのアフラシャブ城跡の宮殿壁画に高句麗人(新羅人)(穴沢味光・馬目順一1976)か新羅人(金元龍1976)がえがかれている。2人の人物は裳をはき、長袍の上衣をきて、靴を履き、佩刀する。頭に鳥翼形立飾をかざす。双手を胸前で拱手する。宮殿跡の時期や壁画図像の考証から7世紀中葉である(穴沢・馬目1976)。668年の統一新羅以前で、新羅人や高句麗人のいずれかである。新羅には7世紀代に西域の文物が流入している。

新羅の真徳王3(649)年に「始服中朝衣冠」(『三国史記』新羅本紀第5)で、中国の衣冠を着るようになった。同4(650)年「以真骨在位者執牙笏」(『三国史記』新羅本紀第5)とあり、笏が用いられる。アフラシャブ壁画に笏を持つ人物が描かれていて、高昌国などからの使節とみられている。『三国史記』卷二十二楽に「放角幘頭」とあるのは双角形立飾帽で新羅人の服飾とみる(金元龍1976)。

唐李賢章懐太子墓壁画 李賢は唐高宗の第2子で、則天武后によって位を剥奪され、文明元年(684)に巴州(四川省巴中県)で死亡した。中宗によって復位し、神龍2年(706)に乾陵に雍王として陪葬された。景雲2年(711)に章懐太子に追封、妃の房氏も合葬された。墓道東壁に6人からなる「賓客図」がえがかれている。前の3人は唐の文官で、籠冠をかぶり、黒領、広袖の朱衣(袍)で、帯を長く垂らす。長袴をはく。裾に襷がある。3人目は手に笏を持つ。4人目は深目高鼻、翻領の褐色袍、束帯黒靴で両手を重ねる。5人目が2本の鳥羽状冠帽、紅領寛袖白短袍、大口褲、黄靴。袖のなかで拱手する。6人目の人物は皮帽をかぶる。円領黄袍、束帯、黄皮の窄褲で尖った皮靴をはく。外套をまとう。双角飾帽の人物は右衽の長袍、袴を着る。袍の下端に襷がほどこされる。西壁の客使図も6人からなる。墓道から墓室にむかって1人目は高鼻深目、胡帽をかぶり、長袍、窄袖、束帯、黒靴で笏を持つ。2人目は高髻、円領窄袖の長袍、紅長袍。3人目は円領窄袖長袍で笏を持ち、短刀を腰につける。4・5・6人目は幘頭をかぶり、円領寛袖長袍で胸前で拱手する(陝西省博1972)。東壁の人物は高句麗あるいは新羅の使節と推定された(金元龍1974)。いっぽう渤海の王子説がある(濱田2000)。「中宗代には大祚榮の冊封は完結しなかったが、王子のの大門芸が入唐しており、開元通宝の初(713年)には帰国したから、壁画の時代には在唐中であつた大門芸や渤海の使者が壁画の使者のモデルであつた可能性はなくない」とみる。高句麗はすでに滅亡しており、7世紀代の唐と高句麗は政治的・交通関係(戦争)にあつた。唐と新羅も白村江戦争以後、政治的・経済的国際関係も流動的であつた。

唐太宗昭陵出土十四国蕃君長石像 昭陵(陝西省礼泉県)の北司馬門跡において、十四国蕃君長石像片が発掘され、なかに「新羅楽浪郡王」銘の石片がみつかった(陝西省考2006、張建林・王小蒙2006)。昭陵は貞観10(636)年に寿陵・陵園の造営がはじまり、貞観二十三(649)年に埋葬された。翌年の永徽(650~655)初年に十四国蕃君長の石像が樹立された。真徳王元年(647)に「唐太宗遣使時節。追贈前王。為光禄大夫。仍册命王為柱国。封楽浪郡王」(『三国史記』第5)とあり、出土した銘文一致する。十四国蕃君長石像の23片のなかに新羅使節の人物像はふくまれていないようで、服飾についてわからない。突厥人の身体像はみついている。

③ 高松塚古墳壁画の持物と服飾

高松塚古墳壁画の画題と朝賀の儀式と儀仗具・持物との関係についてすでに考察されている（岸俊男1972）。男子像は屏繳、囊（柳篋）、袋入太刀、毳杖、胡床、「梓」を持つ。女子像は円翳（円羽）、蠅払い、如意を持つ。東壁の4人の男子群像の構図は、屏繳を持つ人物が1番前で、その後方に囊を持つ2人の人物、右端に斜め横を向く大刀袋を肩にかける人物である。4人の衣服は同じで、いずれも官人であるが、身分差はあったようである。屏繳はあくまで被葬者に対するものであった。屏繳の下にみえる口髭・顎髭を生やした男子人物像は、『貞観儀式』にみえる、舎人を率いて先頭の屏繳の側に立つとされた官人で、女子群像も同様、壁画群像の多くが南の入口の方向に向いている。被葬者に対する威儀の群像である（岸1972）。

元正受朝賀儀では、屏繳一具・円翳十具・円羽十柄・横羽8柄・弓8張・箭8張・太刀・梓4竿・杖2枝・如意2枚・蠅払2枝・笠2枚・挂甲1領などの威儀具がもちいられたという。朝廷儀式の礼法は文武王2年（698）に定められた。大宝元年（701）正月朔日の朝賀の儀式では「天皇御大極殿受朝、其儀於正門樹鳥形幢、左日象青龍朱雀幡、右月象玄武白虎幡、蕃夷使者陳列左右、文物之儀於是備矣」（『続日本紀』大宝元年）。その鳥形幢については、「文安御即位調度図」の「銅鳥幢」とともに、キトラ壁画の寅像の持つ幢が同時代のものとして参考になる（岸1972、奈良文化財研究所2002、内田和伸2008）。宋代に5層の幢に鳥が止まる図像がある（孫機2001）。時代によって、鳥形幢は時空的に、その意味あいはことなる。

朝賀儀式と威儀行列は共通する。高松塚壁画の人物群像とその持物は威儀とともに、出行昇仙の送葬、葬列を表現しているのであろう。

上衣は養老3年（719）に右襟に定められた。高松塚壁画の男子は左衽、円襟の長袍に白色の袴・裳を着用している。脛裳・褶は、天武11年（682）3月に着用が止められ、天武13年閏4月には括緒褌を着ることとされ、朱鳥元年（686）7月再び垂髪とともに脛裳は旧に復した。持統4年（690）の朝服改正では白袴とされ、大宝元（701）年3月に直冠以上に白縛口袴、勤冠以下は白脛裳と定められ、慶雲3年（706）12月に至ってすべて脛裳を廃し、白袴とされた（岸1972）。

682年 親王以下、百寮諸人、自今已後位冠及禪褶脛裳、莫着。亦膳夫采女等之手纏肩巾、肩巾此云比例。並莫服（『日本書紀』天武11年）。

684年 男女、並衣服者、有襪無襪、及結紐長紐、任意服之。其會集之日、着襪而長紐。唯男子者、有圭冠々、而着括緒褌。女年卅以上、髪之結不結、及乘馬縦横、並任意也（『日本書紀』天武十三年）。

686年 更男夫着脛裳、婦女垂髪于者、猶如故（『日本書紀』天武朱鳥元年）。其服飾男子衣裙襦（『隋書』倭国伝）

690年 上下通用綺帶白袴（『日本書紀』持統4年）。

701年 直冠以上に白縛口袴、勤冠以下は白脛裳

706年 廢脛裳、白袴

719年 初令天下百姓右襟（『続日本紀』養老3年2月）（初めて全国の人々に衣服の襟を右前に

させ、職事官の四等官以上のものに笏をもたせた)

719年 始制定婦女衣服様 (『続日本紀』養老3年12月)

唐代の女子の服装は上衣に衫、半臂、下衣に裙、帔を着用する。十六国時代に衫と条紋裙の服装が流行する。早期のものは比較的幅がひろく、晩期のものはせまくなる。高松塚古墳の壁画の条紋裙がその伝統の影響を受けているという (孫機2001)。しかし初唐・盛唐期の服装とはことなる。唐代の男士像は円領の長袍に裳を着るのにたいし、高松塚古墳の男子像は右衽の袍である。

『隋書』には新羅の服飾について「風俗、刑政、衣服、略與高麗、百濟同。每正月旦相賀、王設宴會斑賚羣官。其日拜日月神。…服色尚素、婦人辮髮繞頭、以雜綵及珠為飾」(『隋書』卷81、列傳第46東夷) とある。高松塚女子服装は新羅の於宿知述干墓 (595年) の人物像に類似する。百年前の服装である。法興王7 (520)年

の「百官公服」の服装でもあった。眞徳王3 (649)年に始めて「中朝衣冠」を服した。新羅では元旦の朝賀の儀式において、日月神が拝されていた。日象・月象をあらわす旗のようなものがあったのであろう。四神思想にもかかわる。

④ キトラ古墳の獣首人身十二支像

十二支像のうち、子・丑・寅・午・戌・亥の6体の痕跡が確認されている。子像は朱色の襟の襦に長袍を着る。裾に朱色の縁取りがのこる。右手に身長とほぼ同じ長さの物を持つ。鉤状端部の上に朱色の装飾がある。長条の本体は2条である。楯 (= 鉤鏤) (網干 2006) か弓であろう。丑像も右衽の長袍を着る。袖も朱色の縁どりか下衣の朱色の襦であろうか。朱色の2条にみえる弓状品を持つ。外側の縁辺は山形曲線。端部の下側に垂飾がある。中央部に朱色把手状の痕跡がある。

寅像は朱色のV字形の合わせ襟の襦に、長袍をまとう。袍は左衽。裾に朱色の襦。袖口に丑像のような朱色はみえない。帯をつける。右手に幢を持つ。鋒先は圭頭、剣形で、へら痕跡からみて二又でないようである。

午像は朱色の袍。右手に幢を持つ。戌像はV字の朱色の襟。袖口は朱色。寅像と同じ衣服で、幢を持つのであろう。亥像は子像と同じかたちという。

「弓状品」として、盾説には留保したい。図像的に今まで以上に解明されるかどうかであるが、へらがき痕跡などの検出、赤外線写真などによって、立体的に解像される余地かである。左壁の寅像はあきらかに幢を持つ。左右壁3体とも幢や幡を持つ可能性がある。いずれも四神図像の下位に配置されている。

後 (北) 壁の戌・子・丑像は弓を持ち、東壁の寅は幢を持つ。前 (南) 壁の午像も幢である。後壁の3体が弓、その他は幢を持つ。右手で持ち、左手には刀剣類など何も持たない。この幢の先端部はヤリ先で、幢の形態は懿徳太子墓 (706) の列戟に類似する。

列戟は帝王陵園、官府門前、私府門前に立てられた。列戟の数は身分によって位づけされた。陵園の列戟数は最高で24竿で、陵園朱雀門前に立てられた (申秦雁2001)。蘇定墓 (片側5+5)、章懐太子李賢墓 (片側7+7)、懿徳太子李重潤墓 (片側6+6+6+6)、永泰公主仙恵墓 (片側6+6) の壁画にみられる。

列載は皇帝権力の象徴であり、列載の制は模倣しえない。飛鳥時代にあつて唐の諸制度は周知のことで、唐の遣唐使は身分の象徴である列載を見聞きしていたにちがいない。

『続日本紀』大宝元年（701）にみえる「儀於正門樹鳥形幢」はキトラ古墳と同時期のものである。左に日象・青龍・朱雀の幡、右に月象・玄武・白虎の幡が立てられた。元正受朝賀儀に弓8張、箭8張、矛4竿などの武器・儀器が用いられたが、「盾」はみえない。喪葬令には、葬具として方相輜車、鼓、大角、小角、幡、金鉦饒鼓、楯があげられている。身分によって差異がある。方相氏の葬具は親王一品のみである。方相は「一具」とされているから、何らかの物がある。方相氏は刀と楯を持つが、楯はべつにある。藤ノ木古墳の鞍金具の鬼神像も方相氏とみられ、両手に武器を持つ。送葬には鼓吹がともなう（岸俊男1972）。高松塚古墳壁画の人物像は威具をもつが、キトラ古墳の十二支像は楯（弓）と幢を持つ。鉤鑲は鹵簿を先導する人物、方相氏の持物だ。キトラ壁画では、左右の壁に各3竿の幡（幢）、前後壁に楯6枚となる。喪葬令の楯は7・9枚の奇数である。弓袋（虎鞞豹鞞）は懿徳太子墓（706）、章懐太子墓（706）、長楽公主墓（643）、鄭仁泰墓（66）の壁画などにえがかれている。長楽公主墓の墓道の儀衛は左に弓袋（弓鞞）、長剣、右手に胡籥、手に五色旒旗を持つ。

懿徳太子墓の弓袋は、文安御即位調度図（『群書類従』）のそれに類似する。キトラ十二支像持物の幢・弓（盾）は、朝賀の儀式の持物に共通する。

キトラ十二支像の系譜 キトラ古墳の築造時期は7世紀末葉から8世紀初葉の数十年の間にある。相前後する時期の十二支の図像を検討する

遼寧朝陽黄河路墓（7世紀末葉～8世紀初葉）の獸首人身十二支像（陶俑）は10体が出土。高さ19.6～21.0cm。窄袖の長袍に束帯をしめ、胸前で手を握る。靴をはく。方形台座につくる。笏の有無は不明。長さ32.0、幅4.3、厚さ0.5cmの象牙笏は出土している。ほかに笏を持つ男侍俑（右衽長袍）、胸前で両手を合わせる、右衽長袍の男侍俑、両手で物を持つ女侍俑、跪伏男俑、武士俑、鎮墓獸（人首獸身俑、獸首獸身俑）。女侍俑の上衣は対襟の広袖の衫、衣領、紅彩花紋をほどこす。下衣は紅彩の長条裙を着る。窄袖の衫に領巾をまとう女侍俑などが伴出している。女俑は初唐様式。十二支俑の衣服・束帯は男侍・文官俑と共通する。十二支像は棺の左辺に配列されていたようだ。方位相応に配置されていたかは不明。跪伏俑のその姿は異様だ。辟邪か。被葬者の庇護か。鎮墓獸は棺の隅角で出土している。甬道ないしその龕に男女の石像は置かれた。男俑は右手に「鸚鵡」をとめ、左手に先が曲がった棍棒を持つ。女俑は右の腰帯に「香囊」を下げ、背に小刀のような袋を差している。以上のような出土状況から、十二支像は鎮墓獸などとともに、被葬者を守護する明器とおなじ性格をもつ。隋から初唐の獸首人身十二支像（坐像）は基本的に笏を持つ。墓室は円形埴室墓（単室）で、朝陽張秀墓（643）や朝陽孫黙墓（687）などとともに高宗～武則天時代（650～712）に位置づけられている。

偃師李園墓群において、宋祐墓誌（706）に楷書十二支文字、李嗣墓誌（709）に獸形十二支像、李景由墓（738）では墓誌（獸形十二支像と四神像）と鉄俑。李杼墓誌（882）で四神と獸首人身十二支図像（坐像）と十二支像の造形が変化する。十二支像の変遷は一樣でないが、おおよその移りかわりをしめす。獸首人身十二支像の出現時期が738年前後となる。西安孫承嗣夫婦墓（736）陶俑も同じころだ。墓室空間内で獸形十二支像（墓誌）、獸首人身像の十二支像（明器）が共存する。

陝西高力士墓（762）は壁画十二支像として古い。唐代において十二支像が壁画に表現される時

〈陶俑〉	獸形十二支座像 ⁶¹⁰ …(大業六年墓)…獸首人身十二支像立像 ⁷³⁶ (崔氏墓 ⁷³⁶ 孫承嗣墓) ……………
〈墓誌〉	四神 ⁵⁹⁵ (段威墓) ……四神・獸形十二支像+鉄俑 ⁷³⁸ (李景由墓) ……四神・獸首人身十二支像 ⁷⁴⁸ (張去逸墓) 〈壁画〉 獸形十二支像 ⁵⁶² (茹茹公主墓) …………… 獸首人身十二支像 ⁷⁶² (高力士墓) ……僖宗墓 ⁸⁸⁹
	四神 ⁷²⁴ …………… (韋慎墓) ……四神+獸首人身十二支俑 ^{740 ?} (陝棉十廠M7) ……四神 ⁸⁴⁷ (高克從墓)

期はいつまでさかのぼりえるかである。706年に築造された永泰公主墓など太子級の墓では十二支像は表現されていない。7世紀初葉に流行していなかったことはたしかだ。そのいっぽうキトラ古墳の年代は、時期幅をみつもっても7世紀末葉～8世紀初葉である。その時期、唐の十二支像は座像から立像にかわる。慶州龍江洞古墳は7世紀末葉～8世紀前半)の年代幅のあいだにおさまる。キトラ古墳壁画の獸首人身十二支像は唐・新羅の影響である。

中国古代における獸首人身十二支像は隋代に出現している。獸首人身十二支陶俑は湖南省湘陰の隋大業六年墓(610)や湖北省武漢の馬房山墓や岳家嘴墓などしている。いずれも座像である。獸形から獸首人身像化した。大業六年墓のように、獸首人身十二支像と俑帯十二支像の2種があるが、前者の造形が主流となり、定着化する。十二支像は墓室の耳室・龕、後室棺の左側から出土。棺の位置関係もあり、方位相応に配置されていない。揚州司徒廟鎮墓では墓室内の四壁に沿って配され、方位が意識されたようだ。

四神と十二支像との関係を見ると、隋の馬房山墓、岳家嘴墓、周家大湾241号墓、唐の冉仁才墓(652)、陝棉十廠7号墓などの墓室空間内で、四神壁画と獸首人身十二支像が共存する。四神と十二支思想が一体化された葬送観念が存在した。墓室内の十二支陶俑は、四神とともに被葬者を守護するような状況で配置されている。

いっぽう四神図像と十二支図像が同一墓誌に表現された例がある。唐の史射勿墓(609)や李景由墓(738)で獸形十二支像、張去逸墓(748)、韓森塞秦朝儉墓(804)でともに表現されている。

四神図像と十二支図像は墓室、墓道、棺、墓誌に表現される。それらの表現空間をうつつりかわりのなかで、四神や十二支思想の変容をみる。

陶俑の出土空間は、墓室内左右耳室(馬房山、牛角唐墓)、前室羨道(岳家嘴墓)、墓室兩壁龕、後室棺左(黄河路墓)、墓室内(楊廟墓)である。

四神図と十二支像の表現空間は、墓室(四神)→墓室内四神・墓室内墓誌(四神)→墓室内墓誌(四神・十二支)と変遷する。

⑤ 新羅の獸首人身十二支像の服飾

慶州龍江洞古墳の石室内棺台の周囲で青銅製十二支像と陶俑が出土している(文化財研究所1990)。十二支像の衣服は上半身が不明であるが、袴と袍を着る。帯状の痕跡がある。男子俑は撲頭で袴をはき、襦と円領襦袍(円領欠袴袍)を重ね着る。笏を持つ者がある。円領襦袍は文官、円領欠袴袍は武官用と推定されている。女子俑は半球形髻と裳、裋(帔帛)、衫を着衣する。衫の襟のかたちは唐のものどちがう。慶州隍城洞石室墳の男子像は窄袖の長袍で、袴をはく。真徳王3年

(649)の「始服中朝衣冠」、真徳王4年(650)の「下教以真骨在位者執牙笏」の記事から、時期は7世紀後半初頭(7世紀第3四半期)、王に準ずる地位の墳墓と推定される(李熙濬1993)。

龍江洞古墳は時期的に隍城洞石室墳に次いで築造されたようだ。青銅十二支像は隍城洞石室墳の男子俑の服飾にあいつうじ、それらを摸して鑄造されたのであろう。

新羅の十二支像の表現空間について、姜友邦(1983)は平服十二支像護石だけをめぐらせたもの(推定神文王陵)、武服十二支神将像を配置したもの(聖徳王陵、景德王陵、元聖王陵、興徳王陵)、平服十二支神将像護石をめぐらせ、さらに陵墓の周辺に方位によって蠟石製武服十二支神将像を誌石のように埋めたもの(憲徳王陵、伝金庾信墓)の3類にわけるとみる。聖徳、元聖、憲徳、興徳王陵は被葬者はたしかとみる。

推定神文王(在位681~692年)の陵墓と推定されるのは皇福寺東方の墓で、水田に護石などの石材が遺る。十二支像護石の2体が皇福寺石塔付近の畑地に移された。1体は博物館にあり、その十二支像(巳像)は短衣(襦)に右衽の広袖袍を着て、下衣は袴を着ける。方形台座が表現されている(姜友邦1983)。右手に武器、左手に柄付き円形状のものを持つ。下衣の袴は龍江洞古墳の青銅俑のものに似る。護石十二支像としてもっともふるい。

隍城洞石室墳は片袖式の単室墓で羨道と墓道がつく。円形の墳丘基底に割石積みの外護列石がめぐる。龍江洞古墳の墳丘は2重の外護列石がめぐらされる。内側は割石積みで、外側は切石加工した列石をめぐらす。外側の列石は増築、修築されたさいのものか。内護石と外護石の間に厚い粘土層が続き、同時に築造されたと推定されている。石室は両袖式の穹窿式天井構造をもつ。床面の長さ高さの指数は96、後壁と天井幅の指数は35で、穹窿化がすすんでいる。

ところで新羅金京は、文武14年(674)の月池(雁鴨池)、文武19年(679)の東宮造営、考昭王6年(697)の臨海殿、北宮(767年以前)、坊里名などの記録から7世紀末葉に月城、北宮、東宮などの宮殿が造営され、坊里制がしかれた(東・田中俊明1988、東1999)。

この皇福寺東方の墳墓の位置によって王京の東京極を定めることができる。新羅金京に「喪葬令」が存在したならば、京外にあたる。西辺の路西洞に位置する馬塚・双床塚の横穴式石室墳も京外か、坊里制施行以前の墳墓となる。

隍城洞石室墳→龍江洞石室墳(青銅十二支俑)→双床塚→皇福寺東方墳墓(十二支像護石)…
伝神徳王陵(陰陽五行彩色壁画)

新羅において、十二支像は7世紀末葉から8世紀初葉に存在した。龍江洞石室墳は隍城洞石室墳や皇福寺東方墳墓とも京外に立地する。皇福寺東方墳墓いご、伝金庾信墓など護石十二支像が発達した。十二支像は、墓を鎮護する意味をもつ(斎藤忠2008)。

十二支像の表現空間は、龍江洞古墳のように墓室内の俑から、墓室外の墳丘護石にうつった。キトラ古墳は7世紀末から8世紀初であり、十二支像が壁面にえがかれた。

十二支像増の表現空間は、墓室内、棺周囲(龍江青銅製)、墳丘護石壁面板石(金庾信墓、興徳王陵、九政洞)、墳丘周囲立体像(聖徳王陵)にわけられる。

新羅は唐の四色公服制をとりいれ、国家的身分制・衣服制度として確立した。

法興王7(520)年 春正月。頒示律令。始制百官公服、朱紫之秩(『三国史記』新羅本紀第4)

眞徳王2(648)年 太宗…春秋又請改其章服。以是内出珍服。賜春秋及従者(『三国史記』新羅本紀第5)

眞徳王 3 (649)年 春正月。始服中朝衣冠 (『三国史記』新羅本紀第 5)

文武王 4 (664)年 春正月…金庾信…下教婦人亦服中朝衣装 (『三国史記』新羅本紀第 6)

新羅と唐の連合軍は、662～663年に百済と倭との戦争 (白村江) に勝利したが、668年百済・高句麗の地を新羅が統一した。戦勝国の唐と新羅は政治的利害関係をもちながら、国際関係を結んでいった。倭 (日本) の国際関係は、遣唐使から遣新羅使に移行していった。同時期の唐墓の陶俑・墓誌の獣首人身十二支像をみるとかならず笏が表現されている。笏は養老 3 年以後の制であり、キトラの十二支像が笏でなく、武器・旗・戟を持つ点は示唆ぶかい。笏の制度の採用にかかわる問題でもある。

法興王 7 (520)年 春正月。頒示律令。始制百官公服、朱紫之秩 (『三国史記』新羅本紀第 4)

善徳王元 (632)年 遣使入唐朝貢。

善徳王 2 (633)年 遣使大唐朝貢。

善徳王 4 (634)年 唐遣使持節、冊命王為柱国楽浪郡公新羅王、以襲父封。

善徳王 5 (635)年 慈蔵入唐求法。

眞徳王元 (647)年 唐太宗遣使持節、追贈前王為光祿大夫、仍冊命王為柱国、封楽浪郡王。

眞徳王 2 (648)年 太宗…春秋又請改其章服。以是内出珍服。賜春秋及從者 (『三国史記』新羅本紀第 5)

眞徳王 3 (649)年 春正月。始服中朝衣冠 (『三国史記』新羅本紀第 5)

近年、唐の皇帝、太宗昭陵の北司馬門で「新羅楽浪郡王眞徳」銘の「十四国蕃君長石像」が発掘された (張建林・王小蒙 2006、栢根興 2009、樞原考古学研究所附属博物館 2010)。眞徳王は即位した 647 (眞徳王元) 年に楽浪郡王に封じられた。同 3 年 (649) に唐の朝服 (衣冠) を採用し、同 4 年 (650) に官 (眞骨階層) の持物として笏を採用し、唐の永徽年号を導入した。さらに文武王 4 年 (664) には婦人に中国の衣装を着ることが命じられている。663～664年の唐・新羅と百済・日本の連合軍による戦争、白村江の戦いの時期にあたる。

⑥ 唐皇帝の喪葬と壁画

『大唐元陵儀注』は代宗喪葬を記述した史料で、その葬儀が復元された (金子修一他 2007、金子由紀 2007)。

山陵の日、吉凶二駕 (玉輅と靈駕) が山陵にむかう。鹵簿官、黄麾でさしまねき、鼓吹を鳴らす。陵門に至る。赤麾でさしまねき、吉帷宮に至る。玉輅・鹵簿侍衛官、帷宮門の外に列す。靈駕、陵門の西の凶帷帳殿の下で、駕を回し南向す。隊道 (羨道・過洞・天井) の左に皇親・諸親、文武五官以下、奉礼部、礼生、六品以下、隊道の右に公主・王妃・内官以下が配列する。南神門に至り、将作監、龍輅を靈駕の後に進む。輅梓宮が安置される。神座を設け、宝綬案・諡冊案・哀冊案を奉る。明器をならべる。玄宮を鎖閉する。服があらためられ、凶儀鹵簿は退散、輜輶車・龍輅が焼かれる。

葬儀までに墓室の造営は完工している。玄室は柩、諡冊、哀冊とともに密閉される。公主、王妃、内官、内侍、奉礼郎、礼生、六品・五品、皇親、諸親、文武官、鹵簿侍衛などが参列、葬儀をとり

おこなった。陵園内における葬儀空間は、陵門→南神門→羨門・羨道（斜坡墓道）→甬道→墓門→墓室（玄室）と移る。

元陵は斜坡墓道・過洞・天井・甬道・墓室からなる。墓道に青龍・白虎、過洞・天井・甬道に儀仗隊列、侍従、内官、墓室に屏風画、花鳥、四神、十二支像図がえがかれたのであろう。喪葬の段階で、墓室は完成し、墓室内の壁画彩色も完了している。壁画で装飾された墓道、墓室内で葬礼がなされた。喪葬儀礼、葬列が各種の儀礼と共通する。

代宗李豫元陵は陵園は東西1600m、南北1200mと推定。墓道は南門と北門をむすぶ線上にある。乳台・鶴台が存在する（来村多加史2001）。大歴十四年（779）五月二日長安城内で崩御、同年十月十三日に埋葬された。代宗葬送の779年に前後する時期の墓として、豆盧墓（740年）、742年の李憲墓（睿宗長子）、784年の唐安公主墓（徳宗長女）や787年の邾国大長公主墓（肅宗四女）、811年の恵庄太子李寧墓（憲宗の子）、888年の僖宗靖陵と比較しえる。皇帝・太子墓としては、李憲墓と靖陵のあいだにある。

節愍太子墓（710）では、墓道に青龍・白虎と出行儀仗図、過洞・天井・甬道に東宮外府、内宮外府の属吏僕従、墓室内に墓主を中心とした歌舞楽奏図と玄武、朱雀がえがかれる。墓室の東西壁に青龍・白虎は表現されていない。墓道の青龍・白虎が四神の図像として組みあわさったのだ。

恵庄太子李撝墓（724）の墓道に車馬出行、儀仗図とともに山岳樹木紋がある。過洞の両壁に列戟架図がある。最初に七杆をえがくが、九杆になおしている。東西両壁あわせて一八戟となる。懿徳太子墓は一架12（一架は13？）戟で、合計48～49である。一架に九戟は類例がなく、李寿墓や章懐太子墓は七戟（合計14）、永泰公主墓は一架に六戟（合計12戟）だ。李撝は睿宗の次子であるが、太子級として身分に相当しないという。なお太廟・大社・諸宮殿門には二四戟、東宮諸門は一八戟である。

豆盧墓（740）は睿宗皇帝妃。永泰公主と同じ正一品である。墓室に花草、白鶴、甬道に行列と牽馬がえがかれる。

李憲墓（742）は、睿宗長子の讓皇帝恵陵である。「号墓為陵」とされた。李憲墓は、現在知られる唐代皇親のなかで、懿徳太子李重潤墓（中宗の長子）とともに身分が高い。陵園、陵前石刻、墓室構造、墓誌、哀冊、壁画がみつきり、帝陵に匹敵するのであろう。

高力士墓（762年）は玄宗泰陵に陪葬された。玄宗内侍監（正三品）、齐国公（従一品）。墓は全長52m。墓室は一辺4.2mの外湾する正方形で、高さ5.6m。墓室壁面に四神と獸首人身十二支像と花鳥がえがかれている。

唐安公主墓（784年）（陳安利・馬咏鍾1991）唐安公主は徳宗の長女、皇太子李誦（順宗）の妹。興元元年（784）三月十九に梁州（漢中）城固県で卒し、同年十月二十二日長安城東の龍首原に埋葬された。埋葬まで七ヶ月を要している。韓国貞穆公主に加封された。単室塼墓。斜坡墓道の北端に左右対称に龕室。墓室は一辺4.4m、高2.1m。甬道長3.8m、幅1.2m、高1.8m。斜坡墓道の規模は不明。皇帝親族級の墓室・甬道の構造がわかる。甬道に男女侍群、墓室内に玄武・朱雀図、花鳥草花紋をえがく。墓室の東西壁に青龍、白虎は確認されていない。石門楣石の「双龍」が彫刻されているので、墓室内には表現されなかった可能性がある。墓道の構造や壁画については不明。唐安公主墓石門の文官（進賢冠）・武官（鶡冠）の彫刻は高力士墓のものと類似する。唐の太宗のとき、「進徳冠」の様式をつくり、等級によって飾りにちがいがあつた（孫機2001）。

表 唐安公主墓

甬道	石門	墓室
東壁一 男侍、男侍（馬球杆）、二女侍、二男侍 西壁一 二男侍、女侍、男侍、女侍、男侍	門墩・門坎・門樞一牡 丹花紋 門楣一雙龍紋 門額一朱雀紋 門扇一持劍戴冠武官、 持笏文官	東壁一女人像、男人像、奏樂図？、山石草花 西壁一花鳥図（飛雁）、円盆（四羽鳥） 北壁一玄武、雲紋、男侍、女侍、 南壁一朱雀、雲紋 頂部一天象図

		墓道	第一過洞	第一天井	第二過洞	第二天井	第三過洞	第三天井	前甬道	後甬道	後室
節愍太子墓(710)	東壁	青龍儀仗	五人（円領袍服、拱手）	二侍女一男侍	二人（裙裝左衽）三人（拱手二）	男侍二人（持笏）、雲紋	二女侍（裙裝）、三男侍（男裝女官）	一女侍、四男侍（男裝女官）	三女官・二男侍・二女侍・二男侍・二女侍	二女官男侍	屏風画。如意、团扇、杖を持つ人物（黒色幘頭・長袍、黒腰带）、雲紋、鳥紋
	西壁	白虎儀仗	五人（円領袍服、持笏）	二侍女、一男侍（持笏）	二人（裙裝左衽）三人（男裝人）	男侍二人（持笏裙裝）、天女、仙鶴、雲紋	二女侍（裙裝）、三男侍（男裝女人）	一女侍、四男侍（男裝女官）	三女官・二男侍・二女侍・二男侍・二女侍	二女侍三男侍	樹下美人像、草花紋、花鳥紋
	南壁		—	二男侍（持笏）	—	男侍二人（持笏）	—	二男侍	—	—	屏風画。雲紋、鳥紋
	北壁		—	二男侍（持笏）、仙女、仙鶴	—	男侍二人（持笏裙裝）	—	二男侍（持笏）	—	—	屏風画、墓主群像・樹下美人像、雲紋
李憲墓742	東壁	青龍出行儀仗	二男侍（持笏）	二侍女、一男侍	二男侍	三女侍	二男侍（持笏一）	五男侍（持笏）	男女侍二八（团扇、如意、馬球杆、函）		東壁：樂奏、歌舞、侍女（团扇） 西壁：家屋、雲紋
	西壁	白虎出行儀仗	二男侍（持笏）	二侍女、一男侍	二男侍	三女侍	二男侍（持笏一）	五男侍（持笏）	男女侍二八（团扇、如意、馬球杆、函）		北壁：侍女六、玄武、雲紋 南壁：朱雀、雲紋

咸陽底張湾郊国大長公主墓（787年） 肅宗四女。墓道兩壁に青龍、白虎、第1過洞に拱手男侍、第2過洞に男侍、第1天井に牽馬侍者、第2天井に侍女、墓室東壁に伎樂人、南壁に蓮座がえがかれる。

陝西省乾県靖陵（888）は僖宗李儂陵。墓道に青龍、白虎、儀衛、牽馬図、甬道に執戟武士、墓室・甬道龕内に十二支像。墓室頂部に天象図、北壁に侍臣図をえがく。

唐玄宗の天宝年間（742～）以前、出行、儀仗図が盛行し、初唐・盛唐期は生前の地位と死後の墓葬の規模を重要視した（范淑英2001）。出行儀仗や門前儀仗の儀衛壁画はほぼ三品以上の高官の墓にみられるという。李憲墓（742）をさかいに儀衛図が表現される必然性がなくなってゆく。韋君夫人胡氏墓（742年）では墓道に青龍・白虎とそれらに従う二人の武士、過洞・天井に牽馬図や牽駱駝図が表現されるだけになる。西安陝棉十廠壁画墓のように斜坡墓道じたいも短くなる。儀衛制と喪葬制が分離する。

⑦飛鳥時代服飾の系統

飛鳥時代の服飾についてつぎのような資料がある。

- 高松塚古墳壁画人物図像
- キトラ古墳壁画獸首人身十二支像
- 中宮寺天寿国繡帳人物図像
- 藤原宮木製品人物像
- 法隆寺金堂壁画
- 法隆寺金堂建築墨絵人物像
- 正倉院鳥毛立屏風人物像

高松塚古墳の人物の「群像」表現は同じ時期の唐壁画と共通する。人物群像は新城長公主墓（663）、永泰公主墓（706）など、送葬儀礼のなかで表現されている。

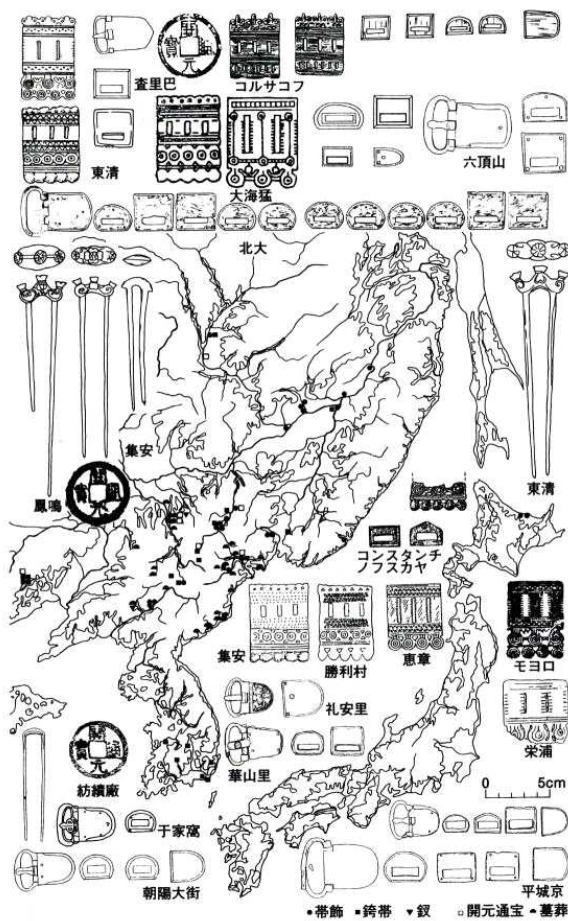
高松塚壁画の女子像は、初唐から盛唐にかけてふくよかな顔立ちになる段階。正倉院鳥毛立女屏風と同じころ。衣服も巾広になる。704年に帰国した遣唐使が見聞した壁画様式であろう。

ところが人物の衣服は唐様式でない。女性の服飾は上衣（衫）、下衣（下身着）は裾（裳裾）、条紋裙で、それ自体は唐の影響をうけている（孫機2001）。

女性の人物図像の衣服は5世紀後半の水山里古墳、5世紀末の双楹塚・梅山里四神塚、6世紀末の於宿知述干墓、7世紀の天寿国繡帳の人物像、8世紀初の高松塚古墳というように、各国で一定の共通性を持ちながら発達した。飛鳥時代の衣服は、高句麗・百済・新羅の三国と共通していた。

キトラ古墳の壁画は、方位の四神と時の十二支、日月、星宿図で構成されている。その獸首十二支像は唐や新羅の影響による。

飛鳥時代の7世紀初めから、高句麗僧の慧慈・曇徴、画師の黄文連本実、百済僧觀勒らによって天文学、漏刻、仏教、道教思想がもたらされた。近年発掘された法隆寺若草伽藍壁画は百済弥勒寺のものと同様。高句麗・百済から伝えられた基層文化に新しく新羅・唐の文化を受容した。



キトラ・高松塚古墳の壁画の基層には、高句麗・百済があり、それに唐の影響という二重構造となっている。キトラ・高松塚古墳の築造時期は、百済・高句麗の滅亡後の7世紀末から8世紀初めとかがえられる。その絶対年代は被葬者の比定（仮説）にもとづき、検証することも有効である。

キトラ・高松塚古墳壁画には、日本と百済・新羅・高句麗・唐という東アジア世界における、さまざまな国際関係が表現されている。

キトラ・高松塚の玄武像は薬師寺の金堂台座の図に類似する。飛鳥時代の7世紀後半に玄武図が存在したのである。元薬師寺や大官大寺は新羅系の双塔式伽藍である。遣唐使が中断した30年間のあいだ、白村江の戦争の戦勝国である新羅とは交流していた。

高句麗や百済伝来の四神図像もあるが、キトラの獣頭十二支像の系譜関係から、

新羅系統の四神図があった。法隆寺若草伽藍や上淀麿寺出土の金堂壁画は7世紀前半代の百済、たとえば益山弥勒寺の壁画に類似する。再建法隆寺の金堂壁画は盛唐期の敦煌壁画と関係がふかい。百済や新羅をつうじて唐の交流関係があったのであろう。662年の白村江の戦いはいったい何であったのか。

キトラ高松塚古墳壁画の四神図像の粉本は蘇定方墓など7世紀末葉～8世紀初葉に流入したものである。青龍・白虎・玄武図像は7世紀末葉らしいの唐様式である。キトラ・高松塚壁画と薬師寺金堂本尊台座の青龍・白虎図像はことなる。薬師寺本尊は平城京遷都後の造仏でなく、元薬師寺から移されたものであろうか。藤原京期に元薬師寺は698年に完工している。新羅系の伽藍配置をもつ。仏像も飛鳥仏とことなる。

薬師寺金堂本尊台座の四神図像は唐系統の紋様である。慶州芬皇寺の軒平瓦の青龍の後足・尾の交絡図像とともに、唐の四神図像は新羅に流入している。薬師寺は文武2年（698）に完工した新羅への四神図像の流入時期も7世紀代である。

キトラ天文図は飛鳥時代に流入した高句麗系統のもので、6世紀末葉から7世紀初葉に高句麗か、百済を経由して流入した。それにたいし高松塚古墳は唐系統である。

キトラの十二支像の持物の幢の図像は蘇定方墓（667）や懿徳太子墓（706）など、7世紀末葉から8世紀初めの形態である。寅像の持物が盾（鉤鑣）か弓であろうが、弓とみている。キトラ十二支像の衣服は唐・新羅様式である。

壁画粉本の流入時期について具体的にかんがえてみよう。まずキトラ・高松塚と唐壁画の図像の年代である。青龍・白虎図像からみて、その上限は蘇定方墓が築造された7世紀なかばである。獸首人身十二支像の上限は隋である。李爽墓（667）遣唐使が中断したのは670年である。

7世紀には高句麗や百済の僧、画師、遣隋使や遣唐使から四神・天文思想は流入している。日本書紀』には、671（斉明10）年3月に、黄書造（連）本実が水ばかりを献上し、その4月に漏剋が設置されたとみえる。その本実は、遣唐使に随行し、天智10年に帰国した。薬師寺の仏足石の図がもたらされた。また大宝2（702）年の持統喪儀の作殯宮司、慶雲4（707）年の文武の殯宮に供奉し、葬儀の御装司として、葬儀の威儀を司っていたという（岸俊男1972、井上薫1972、和田萃1998）。こうした職能からみて、黄文連本実らの遣唐使によって粉本が将来した。670年前後に流行していた壁画構成や画風・画法が将来され、四神図像の粉本も入手していた可能性がつよい。

キトラ古墳の獸首人身十二支像は、日本・新羅・唐という国際環境をうきぼりにする。7世紀末から8世紀にかけて、「白村江の戦い」の敗戦をへて、669年に遣唐使がとどえるが、702年に再開されるまでの30年間、遣新羅使など新羅との通交は活発化した。藤原京内の元薬師寺（686年？）、大官大寺などの新羅系寺院の双塔式伽藍、飛鳥苑地と慶州雁鴨池、藤原京の造宮と新羅王京、瀬多橋と慶州月精橋の橋脚構造にみられる建築・土木技術、新羅土器の分布と新羅系渡来人、正倉院文物のなかの新羅系文物など、新羅との国際関係が緊密であった。

キトラ・高松塚古墳、元薬師寺金堂台座、正倉院十二支八卦鏡の4種の図像に共通性がある。飛鳥京・藤原京の地域空間内に、造墓、画師、金工の分業が発達するが、それらを統括した工人集団が存在した。同時代の歴史環境にあった。

高松塚古墳壁画は渤海貞孝公主墓（792年）の衣服や威儀具が類似する。日本・渤海・新羅・唐の文化、国際関係が壁画に表象されている。

引用文献（年代順）

- 王増新1964「遼寧撫順市前屯、窪潭木高句麗墓発掘簡報」『考古』1964-10
- 陝西省博物館・乾県文教局唐墓発掘組1972「唐章懐太子墓発掘簡報」『文物』1972-7
- 岸俊男1972「文献史料と高松塚壁画古墳」『壁画古墳高松塚』
- 井上薫1972「白鳳・奈良朝の黄文画師」『壁画古墳高松塚』
- 金元龍1984「唐李賢墓壁画の新羅使（？）について」『考古美術』123・124、『韓国美術史研究』一志社
- 金元龍1986「サマルカンドアフラシヤブ宮殿壁画の使節図」『考古美術』129・130、『韓国美術史研究』一志社
- 劉曉東・付曄1982「試論三霊墳的年代与墓主人身分」『北方文物』1982-1
- 延辺朝鮮族自治州博物館1982「渤海貞孝公主墓発掘簡報」『社会科学戦線』1982-1
- 延辺博物館1982「和龍県龍海渤海墓群」『社会科学戦線』1982-1
- 姜友邦1983『新羅の十二支像』近藤出版社
- 町田章1987『古代東アジアの装飾墓』同朋舎出版
- 東潮・田中俊明1988『韓国の古代遺跡1 新羅篇』中央公論社
- 文化財研究所・慶州古蹟発掘調査団1990『慶州龍江洞古墳発掘調査報告書』
- 黒龍江省文物考古研究所1992「黒龍江発掘渤海大型石室壁画墓」『中国文物報』1992年1月19日第3期（『中国東北考古集成』）

- 李熙濬・李康承1993『慶州隍城洞石室墳』国立慶州博物館・慶州市
- 池升元1994「渤海貞孝公主墓壁画浅析」『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社
- 和田萃1998「高松塚古墳（覚書き）」『古代学研究』140
- 網干善教1999『高松塚古墳の研究』同朋舎
- 東潮1999「新羅金京の坊里制」『条里制・古代都市研究』15
- 東潮1999「北朝・隋唐と高句麗壁画一四神図像と畏獣図像を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』80
- 濱田耕策2000『渤海国興亡史』吉川弘文館
- 東潮2000「渤海墓制と領域」『朝鮮学報』176・177
- 孫機2001『中国古輿服論叢』文物出版社
- 来村多加史2001『唐代皇帝陵の研究』学生社
- 申秦雁・楊效俊2001「陝西唐墓壁画研究綜述」陝西歴史博物館編『唐墓壁画研究文集』三秦出版社
- 范淑英2001「唐墓壁画〈儀衛図〉的内容和等級」『唐壁画研究文集』三秦出版社
- 奈良文化財研究所2002『飛鳥・藤原京展』,朝日新聞社
- 張建林・王小蒙2006「対唐昭陵北司馬門遺址考古新発現的幾点認識」『考古与文物』2006-6
- 陝西省考古研究所・昭陵博物館2006「2002年度唐昭陵北司馬門遺址発掘簡報」『考古与文物』2006-6
- 網干善教2006『壁画古墳の研究』,学生社
- 昭陵博物館2006『昭陵唐墓壁画』文物出版社
- 瀋陽市文物考古研究所2006「2004年度瀋陽市石台子山城高句麗墓葬発掘簡報」『北方文物』2006-2
- 金子修一・稲田奈津子・金子由岐・小幡みちる2007「大唐元陵儀注試釈（7）」『シンポジウム東アジア世界における王権の態様—陵墓・王権儀礼の視点から』國學院大學文学部古代王権研究会
- 金子由紀2007「『大唐元陵儀注』に見る唐皇帝の埋葬儀礼」『シンポジウム東アジア世界における王権の態様—陵墓・王権儀礼の視点から』國學院大學文学部古代王権研究会
- 遼寧省文物考古研究所・撫順市博物館2007「遼寧撫順市施家墓地発掘簡報」『考古』2007-10
- 内田和伸2008「平城京第1次大極殿院と高御座の設計思想」『古代日本の構造と原理』青木書店.
- 斎藤忠2008『古代朝鮮文化と日本』『斎藤忠著作選集』2,雄山閣出版
- 遼寧省文物考古研究所・瀋陽市文物考古研究所2008「瀋陽市石台子山城高句麗墓葬2002～2003年発掘簡報」『考古』2008-10
- 東潮2009『高句麗壁画と東アジア』学生社
- 吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文物管理委员会為公室2009「吉林和龍市龍海渤海王室墓葬発掘簡報」『考古』2009-6
- 栢根興2009『唐朝與新羅關係史論』中国社会科学出版社吉林省文物考古研究所・敦化文物管理所2009「吉林敦化市六頂山墓群2004年発掘簡報」『考古』2009-6
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2010『大唐皇帝陵』『奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別図録』73
- 東潮2011キトラ・高松塚壁画をめぐる東アジア古代の歴史環境—唐・新羅・日本の国際関係—『慶北大学校考古人類学科30周年記念考古学論叢』